

1《祈る》-長田弘の詩とヴォカリーズによる-

(作詞:長田弘 作曲:三宅悠太)

長田弘について

長田弘は1939年に福島県福島市に誕生する。その後福島県立福島高校に入学し、早稲田大学第一文学部を卒業する。

主な作品に、「われらの新鮮な旅人」「深呼吸の必要」「死者の贈り物」「本という不思議」などがある。

この人の詩は色々な合唱曲に収められているが、詩を書く人であり、またエッセイを書く人でもある。個人的に好きで何冊か読んだのだが、とても面白い視点を持っている上に、ある種の信念を感じる。

長田弘は例えば「地域に暮らすこと、その地域の風景の裏を体験すること」「今いない死者と語らうこと」「本の仕様、その製本に注目しよう」のように、物事そのものだけでなくみえないコンテクストに注目することが多い。彼の世界観は独特と思われるように一見見えるが、豊富なりソースに基づいた堅実な、そして馴染みやすい世界の知覚の仕方をしているように感じる。

曲について

この曲のそもそものコンセプトは、東日本大震災に向けての祈りである。空の下という詩が使われているが、この詩は長田氏が震災の後に作ったものではなく、震災の起こる前に作ったものである。

長田弘に関しては、大事なことばを本で繰り返したりすることも多い。例えば、「ゆっくりとした時間」や「一人でいること」についてはエッセイ作品で言及されることも多い。単一の旋律で繰り返される「一人でいることができなくてはいけない」には強い意味が背後に存在している。

この曲の構成において一番目につくのは vocalise であろう。息から始まり、かなり長い間 vocalise によって曲は進行していくが、非常につよいメッセージを感じさせる部分である。合唱作品における新たな手法であると断言しても良いのではないか。その中にどんなことばを見出せうるのか、考えてみてほしい。回顧、怒り、後悔、自然、うねり、この音の渦の中に巻き込まれているもののものを解析、そして想像し創成していくのが僕らに託された使命なのである。

途中で語りが入るが、この語りは男性でも女性でも可能であるということである。当団でやると決まったならば、おそらく男性の語りで行くのではないだろうか。

譜面について

この曲については、まず一番初め、そしてその周辺の息の部分の暗記が非常に難しい。いわずもがな、息の部分は聞こえないため、まわりがなにやっているのかまったくわからなくなり、かといって指揮をみても一度乗り遅れてしまうと完全に取り残されるし、あああ頼りになるのはピアノだけや！という状況に陥りやすい。ここは即暗譜をおすすめしたいところである。

また。Vocalise のエネルギーとは裏腹に、語りの部分にはダイレクトに衝撃を与える場所というより、沈黙、ピアノソロの引き立て方が重要になってくる点がたくさんある。そのあたりの雰囲気の継承についてもよく考えるべきだと思われる。また、最後の終焉の仕方が本当に特殊でこれに好き嫌いが多いに分かれる点ではあるのだが、一本の線になるように、音のブレを極力無くしていくような音作りが必要である。